

<http://hime.46296.com/>



「真夏の昼の姫展」日記

白ふくろう舎 10周年記念個展
真夏の昼の姫展
PRINCESS: A MIDSUMMER DAY'S DREAM

LE DECOI ギャラリールデコ
2010. 8.17(TUE) - 8.22(SUN)
OPEN 11:00 CLOSE 19:00 (8.22 CLOSE 17:00)
Closing Party 8.22(SUN) 11:00-17:00

真夏の昼の 姫展



はじめまして



イラスト描きの白ふくろう舎です。キラキラした少女漫画風のイラストなどを雑誌やwebに描いています。

フリーランスのイラストレーターになってちょうど10年目、何か記念になることがしたくて、はじめての個展を開くことにしました。

グループ展なども参加したことがないので、何もかも試行錯誤です。

準備から終了まで、日記とアルバムがわりに綴ってみることにしました。

よろしかったらおつきあいくださいね。



個展をするなら、まずは会場を決めなくてはなりません。ギャラリーを選ぶにあたり、はずせないことがいくつかありました。

来場して下さったかたがゆっくりできるスペースがあること。

そして、できれば、ただ座るだけではなくて、本が読めたり何か楽しい遊びができたりといった、絵を見るだけでなく何か参加できるようなコーナーをつくれるだけの空間あること。

たとえばコンサートなら、演奏している間はお客様にとどまっていただけだけれど、絵を描くのにどんなに時間をかけても、見るのにはそれほど時間はかかりません。

何十点、何百点も作品が置けるわけではないし、数点の絵をみるためにわざわざ足を運んでもらうのはなんだかちょっと申し訳ない。

それに折角来て貰えたなら、できるだけ長くいて欲しい。そしてできれば「楽しかったな」と思いながら帰って頂きたい。

でも、そんな広いスペースの会場はとても手がとどかなそうだし、審査もあるかもしれないし...

ネットで検索したり、実際に足を運んで、ギャラリーを探しはじめたのは4月。

実際にスケジュールをみると、心積もりしていた秋の展示は、あらかじめのギャラリーでは予約が入っていました。

今頃、自分ののんびり加減に気づいてあせりはじめます。



ある日、ネットの情報をたよりに、渋谷の[ギャラリー・ルデコ](#)を訪れました。ルデコはなかなか雰囲気がよくて、6階から1階までみてまわったところ、たまたまそのときは何の展示もしていなかった1階のスペースがあまりに理想通りでびっくり！

高い天井、通りからガラス越しに見える広くて適度に奥まった空間、そしてカウンター付のキッチン、雑誌やポストカードがおけそうなラック。テーブルや椅子もお気に入りのものではなくて、すわり心地のいいもの。

さらに、中央に鎮座するグランドピアノ。

カフェで展示するのも、ライブハウスで展示するのも違う。でもその気になればお茶やお菓子もだせそうだし、ピアノを弾いてもらうこともできる。図書スペースをつくるのも簡単。なにより通りから見える1階、入りやすいのがいい。渋谷駅からも近いし。

でもその日、いきなり申し込むなどということはできませんでした。

入り口に張ってあったスケジュール表は、8月までしかなかったし、ネットで調べたときも1階は他の階より当然金額も高くて、候補からはずすつもりでした。

ギャラリーの方に声をかけて写真だけ撮らせてもらい、その日は何もきかずに帰りました。

しばらく後、イラストレーター仲間の[むかいあぐるさん](#)が参加するグループ展GLP・Coloreがギャラリールデコで開催されると知り、もう一度訪れる機会がありました。会場にいらした、作家さんとおしゃべりさせていただきながら、やはりこの場所はいいなあと思っていると、ちょうどオーナーの島中さんがいらっしゃいました。

そのときのことが、実は今思い出そうとしてもぼんやりしているのです。が、とにかく何か急に「ここをつかいたい」と伝えなくてはという気持ちにかられ、今後のスケジュールをうかがったところ、秋以降はもう1階を貸しギャラリーとしては使用しないとのことのお答え。

なんというタイミングの悪さ・・・。

それでも、この1階がとても気に入ったことと、その理由を妙に熱っぽく語ってしまったところ、島中さんがとても興味深くきいてくださり、「夏のお盆明け1週間だけ空いているから、仮押さえしていいですよ」と言って頂けたのです。

その日は帰ってもなんだか興奮がぬけず、フワフワしていたように思います。



秋のつもりが、いきおいで夏、しかも分不相応に広いギャラリーをおさえてしまったことは、なかなか無謀だったと思うのですが、そのときはまだ「よいギャラリーがみつかって、貸していただけだ！」ということに舞い上がって、実感できていませんでした。とはいえ、スケジュールが予定よりはやまってしまったのは事実。まだぼんやりとしか考えていなかった展示について、早急に詰めなくてははいけません。

フリーのイラストレーターになって10年、これまではグループ展や個展といったものは自分には縁がないことに思えて、考えなかったのですが、今年やろうと思ったのはどういう心境の変化か。ひとつには10年間この仕事を続けられたことへの感謝祭的な意味と、もうひとつはやはり「白ふくろう舎」というものをもっと認知してもらえるきっかけがほしいと思い始めたことでした。

そもそも「白ふくろう舎」などという、個人名には思えない名前にしたのも、いろいろなタッチを描くのに一人の名前だとかえってうさんくさい、という理由からでした。まだ自分の画風などというものもわからず、頂いた発注をとにかくひたすら打ち返すためにたくさんの絵柄を描き、結果として思惑通り「数人のイラストレータを抱えている事務所」のようなイメージを与えて、同じ号の雑誌から同時に数企画の発注を頂いたりもしました。

作家としての認知度は低くなくても、飽きられず、とにかく少しでも長く仕事をしたい、という願いはこの10年については叶えられ、初年度から特に経済的に困ることもなくお仕事をいただけたのは本当にありがたいことでした。

が、人間、欲というものがでてくるもので。

ただ絵を描いていられればいいということではないなあ、イラスト描きとしてもう少し、何か残していきたいなあと思い始めたのでした。



ありがたいことに、仕事を始めたころから描き続けていた、懐かしい少女漫画風のイラストが、最近の流行と重なり、一部の方々からは「白ふくろう舎＝お姫様っぽいイラスト」という認識をいただきはじめています。

もともと世代的に好き、ということもあるのですが、いつ頃からか、瞳キラキラのこの画風が、「面白いもの」「昔懐かしいもののパロディー」としてばかり扱われることに対し、少し残念な気がしていました。もちろん、純粋にこの頃の少女漫画が好きという方も多いのですが、雑誌や広告での扱いは、やはり「目がすごく大きくて何かというと大粒の涙をこぼし、デッサンはやや狂っていて、額に縦線とかショックをうけると白目になるという独特の表現がおもしろい」という、笑いやインパクトをねらったものがほとんどに思えて。

でも今あらためて子供の頃みていた漫画やイラストをみると、その絵としての魅力や技術の確かさ、そして何より表現としての新しさに、目を見張る思いがしました。

「少女漫画」の持つ独特の画風で、今を生きる女の子を描いてみたい。そして、レトロなあしらいとしてでなく、雑誌や広告の中心をはれるようなイラストを描きたい。

数年前からぼんやりと考えていたことが、ようやく言葉になってかたまってきました。

そう、数年前から、というより意識としてはもっと昔から、そんな風を感じてはいたのだと思います。

ただ悲しいことに、自分の技術も、意識もそこまでなかなか追いついてこなかった。いまだに思い描いていたイメージのイラストは描けていない。この個展が、集中してその方向を探る、いいチャンスになるかもしれない。

さらにこのころ、今までの流れでは難しいだろうと思っていたような媒体からの発注や、新規の分野からの依頼があったことも、気持ちを後押ししてくれました。折角冒険してくださるクライアントがいるのなら、それに応えたい。

少女漫画の表現で、お姫様を描いて、そこに「自分ならではの、現代ならではの」ものを盛り込んでいこう。

個展のテーマは、「姫」に決まりです。

個展のテーマは姫。

それも、頭をすごく大きく結った姫にしよう、と思いました。

少し前から、ネットなどで「盛りヘア」などによばれる、独創的な髪型が話題になっていました。頭を噴水みたいに大きく盛りたてて、お花を飾ったり、果ては鳥かごまで載せたり。

そんな写真を目にして、びっくりしただけでなく、とても面白いと思い、そして「現実のほうがイラストよりも”すっとなで”いる！」という気持ちになって、ちょっと焦りのようなものを感じたものです。

仕事をはじめた頃、いわゆる「ギャル雑誌」とのご縁が多かったこともあり、それまでまったくなじみのなかった「ギャル文化」のようなものにずいぶんと接する機会が増えました。

その頃は第何次だかの「マンバブーム」などもあって、昔は「なんでわざわざ可愛い顔を台無しにするんだろう」としか思えなかったあのメイクが、だんだん面白くなってきたのは、単に慣れたからではなかったと思います。

普通メイクやファッションといったら、もちろん自己表現もあるでしょうが、対人コミュニケーション、ことに異性へのアプローチが土台になっているもの。けれどマンバだの盛りヘアだのというのはそういう次元を軽く超えています。かといって、あの不可思議なメイクをしているギャルたちが、何か強烈な、たとえば「男性うけする女性を演じることへのアンチテーゼ」とか、そういう意識でやっているわけではありません。

面白いから、自分たちが楽しいから、イケてると思うからやる。それがどんどんエスカレートする。

その「楽しいからエスカレートしてしまう」感じは、おそらく口ココのあの恐るべきかつらや、花魁の頭などでも同じだったのではないかと思います（バブルの時代の肩パッドや立ち上がる前髪も似たようなものでしょう）。

「だって楽しいじゃない」という、朗らかな明るさは、姫様と現代女子とをかわらずつなぐパワーのようなものに思えて、それがなんだか好ましくほほえましい。

さらに、エスカレートして、いきつくところまでいった目新しく奇抜なファッションは、その片鱗を少しずつ「一般の人たち」に受け込ませて消えていくので、ギャル雑誌に一時期ほどの派手なメイクがなくなった一方で、学生やOLむけの雑誌が少しギャル寄りになっていたり、つけまつげなどが割と一般的になっていたりして、今の女の子たちは全体的にメイクもファッションも「ちょっと派手」なようです。



そして、長いまつげ、くるくる巻いたりゆるふわにして少しボリュームをだした髪、フリフリしたシフォンのワンピース、そんな格好が「一部のごくごく可愛くて、夢見がちな女子」のものではなく、一般的に受け入れられた...その姿をみると、まるで「昔あこがれた少女漫画の中の主人公そのもの」のようで、なんだかいい時代だなあ、今の子たちは皆本当にお姫様みたいだなあ、と思っていたのです。

ただレトロな懐かしいお姫様を偲ぶのではなく、今の女の子たちこそが「あの憧れのお姫様」なんだ、...そんな気持ちで、姫展の準備ははじまりました。



会場とテーマは決まったものの、気がつけばあまり日数もなく、通常の仕事は平行しながらとなると、できることは限られてくるのですが、やってみたいことはいくらでもありました。

まず何より絵を飾らなければはじまりませんが、今回こだわったのは、仕事ではなかなか描けない手描きの作品を飾ること。折角印刷物でなく原画をみていただける機会なので、ここは妥協せずがんばろうと思いました。

水彩をつかったカラー作品と、昨年から少しずつ描いている、シャープペンシルによるモノクロの作品。

どちらも頭をこんもりと盛った姫です。サイズもいつもより少し大きめに描こうと思います。

さらにイラストは、原画だけでなく、雑貨やアクセサリ、バッグなどに展開して、姫イラストの可能性をもっともっと感じてもらえるようにしたい。できればバッグは、既製品にプリントなどで済ませず、ちゃんと作家さんに頼んで、それ自体が作品として力を持つものにしたいところです。

それから、とにかく来場して下さった方が楽しめる場所がほしいので、前から「欲しい」といって頂いていたぬりえを作って、実際に塗ってもらえるコーナーを作ろう。

もし余裕があれば、イラストのスタンプも用意して、好みのエコバッグなんかも作ってもらえるようにしたい。

いっそ来てくれた人自身が展示の一部になってしまう、そんなしかけがあっても楽しいかもしれない。舞踏会のような仮面を作って、会場にいる人はみんなつけてもらうのはどうだろうか？

イベントごとでは、おみやげにちょっとした買い物もできるといいから、物販コーナーもほしい。これまでも時々作ったようなメモ帳や、ノート、バッジのような、子供のお小遣いでも買えるもの。

惚れ込んだカフェコーナーにはお菓子、それもどうせならこの姫展用にこしらえた特製のお菓子がほしい。おみやげにもできて、その場で食べることもできて、絵をみながらお茶でひとやすみできたらいいな。

考えれば考えるほど、アイデアは湧いてくるものの、いったいこれがどこまで実現可能なのか。まともにスケジュール表やリストにおとしこむと、あまりの無謀さにやる気がうせてしまいそうで、結局まっさらなノートに思いつくままメモだけ書きなぐって、なし崩しに作品作りがはじまりました。



何はさておき、展示できるイラストがなければはじまりません。モノクロの作品は数点あるのでこのまま増やしていくとして、カラーで満足できるものはなく、一から描いていかなくては。それができてからDMやフライヤーをつくることになるので、のんびりもしてられません。

後々メインとしてつかうことになる写真のイラストが、一番はじめに着手したのですが、この段階の日付をみると6月10日。配布物などは1ヶ月前にはできていてほしいことを考えると、まったく余裕も何もないなど、今ふりかえってギョッとします。でもこのころはまだそこまで切羽詰っておらず、久々の水彩が楽しくて、でもなかなか思うようにしあがらなくて、毎日少しずつ描き進めていきました。



肝心のイラスト着手はかなりギリギリでしたが、自分でやること以外はもう少しはやくはじめていました。

イラストをつかったコラボレーションバッグ。

もともと自分のイラストをつかったバッグが欲しくて、業者に依頼してプリントした革のトートなどがあったのですが、今回はテーマの世界観にあわせて、完全にオリジナルな作品が欲しいと思いました。

でも、バッグ作家さんに知り合いはいないし...と考えたところ、いえ、幸いなことに私にもいました。この方に依頼してみたい、そしてまったく知らない仲ではない、という人が。

西荻窪に、いわゆるレンタルボックスの発祥の地である[「ニヒル牛」](#)[「ニヒル牛2」](#)というお店があるのですが、ご縁があって数年前からそちらにちょっとした小物をおいたり、イベントをさせていただいたりしていたのです。その店にはいわゆる手芸品の域をこえた、個性的で高い技術をもつ、いろいろな作家さんがいて、カフェの常連でもある私は知らないうちにかなりの方と顔見知りになっていました。

今回、バッグの製作を頼んでみたいと思った青山由華理さんも、人気のバッグ作家さん。彼女の作るバッグは主に布製で、A4くらいのものは楽に入るとか、肩掛けができるとか、芯がしっかりはいついてつかいやすいとか、個人的に「こんなバッグが欲しいな」というポイントをクリアしつつ、とてもかわいいので、前から気になっていました。

今回バッグを作るなら、いかにも姫が持ちそうなパーティーバッグではなく、普段使いにつかえるような実用性がありながら、でもちゃんと姫！という、あまりなさそうなバッグがいいなと思ったのです。あんなつかいやすいバッグを作っている青山さんなら、きっとわかってくれる。でも、他人のイラストと世界観を表現するようなものを、彼女がひきうけてくれるでしょうか？

不安と期待を抱えつつ、彼女の連絡先を教えてもらおうとむかったある日のニヒル牛で、バッタリその本人と遭遇、これは幸先のいい偶然です。それからメールでやりとりをし、思った以上に快く彼女が引き受けてくれ、最初の打ち合わせを吉祥寺のカフェ（写真、カフェゼノン）でおこなったのが5月上旬。

打ち合わせで「こうしたい、ああしたい」と私がいうのを、青山さんが的確に理解してくれて、二人でどんどん話がふくらんでいき、時間も忘れて話し込んだ高揚感がありありとよみがえってきます。その後、布をお渡ししたり、一緒にピンとくる材料や素材を買出ししたりするたびに、今まで一人で作ろうと思っていた世界が、言葉のやりとりからどんどん明確になり、さらに広がり、生き生き色づいていくのは、本当に嬉しい経験でした。

とはいえ肝心の製作は青山さんに丸ごとお願いするしかありません。デザインもふくめ、まるっきりおまかせしてしまった私は、彼女の苦勞もしらずに「これで安心」と、できあがりまでひたすらワクワクして待つことになりました。



もうひとつの、そして自分では作れない目玉となる「姫展のお菓子」。これもどうしようかと悩んだのですが、そうそう、ニヒル牛にはお菓子やさんたちも出入りしているのです。

オーナーの石川あるさんに、「実は個展でお菓子を作ってもらう人を探していて」と相談したところ、彼女が即答してくれたのは「大人カフェさんに頼んでみたら」ということでした。

これもまた、実は私が「できたらこの人に頼めないかな」と思っていた人なので、やはり判断は間違っていないと一人でほくそ笑みます。

「大人カフェ」さんというのは、二人のユニットで、ニヒル牛のイベントなどにかわいいクッキーやケーキを納品してくれる人気のお菓子屋さん。ニヒル牛以外では、[Patisserie chimmie](#)（パティシエ珍味）さんという屋号で活動しています。ユニットのおひとり、銀作家の[Tさん](#)（なぜお菓子屋さんと銀作家さんがユニットなのかはいまだに知らないのですが、とてもよいコンビ）につなぎをつけていただき、Chimmieさんから快諾いただくことができました。彼女のホームグラウンド宇都宮で、中国茶をのみながら「はじめまして」のご挨拶と打ち合わせをしたのが5月の半ば。

このときも、ぼんやりとしたイメージでしかなかった私の話から、Chimmieさんがどんどんアイデアをふくらませてくれて、またしても大興奮。イベント慣れしている彼女は、お茶の出し方やセレクト、お菓子の飾り方や販売方法、そしてアイテムの選定など、どんどん意見を出してくれました。なんと心強い人に頼んだんだろう！

中でも予想外だったのは、「せっかくだからイラストをプリントしたお菓子をつくってみましょうよ」という提案。そこまで大量に作れるわけではなし、個人でそんなことができるの？（以前、菓子会社の企画部にいたことがあるので、小ロットのオリジナル品をつくるのは結構高くつくという感覚がしみついているのです）とピンとこないでいる私に彼女が提案してくれたのは、「ステンシルシートのようなものをつかって、アイシングでクッキーに絵を描く」というもの。

そんなことができたら素敵すぎる！ちょうど、思い切って小型カッティングマシンを購入していたので、試行錯誤しつつステンシルシートの試作をつくり、彼女に送ることができたのは、6月にはいつからでした。



その後のChimmieさんはさまざまな問題と格闘しつつ、怒涛の仕込みに入っていくのですが、これもまた私は「まかせたからには安心」とばかり、その苦勞もしらずに自分の作業に没頭するの
でした・・・。





さて、イラストと平行してこまごましたもの、時間がかかりそうなものを作り始めます。女子はお菓子やバッグと同じくらいアクセサリーも好き、ということでイラストを加工したアクセサリー。樹脂のパーツ作りは落ち着いてやらないといけないので、はやめに着手しました・・・といっても大して余裕はありませんが。

カラフルでキッチュなアクセサリーもいいのですが、今回のイメージではモノクロのイラストをつかって、できるだけ白やシルバー、金古美カラーでまとめることに。

最近雑誌やショップでも「姫系」というジャンルがありますが、そのイメージがどうしても白とピンク、黒とピンクなどガーリーに寄り勝ちで自分にはちょっと近寄れなかったので、シックな感じ

に仕上げられたらいいなと思うのです。が、技術が追いつくかどうか、肝心のそこが不安です。





イラストをつかった小物は、アクセサリーのほかにもいろいろ作りたいと思っていました。小さな家具や化粧品のボトル、インテリアフレームにクッション、羽根ペン。

「こんなものが自分の部屋にあったらいいな」と思ってもらえたらいいし、もう一方では雑誌の小物撮影などのスタイリングにオリジナル雑貨をつかったりすれば、特集のイメージにあったページをより表現しやすい、というようなことも考えました。

そこまで伝えられる展示になるかどうかは、このがんばりにかかっているのですが・・・こまごました作業は意外と進みが遅く、ほんの洒落のつ

もりだった羽ペンをこしらえるのにも3日かかってしまう始末。

それでもなんとか少しずつ、既製品なども使用しながら、私の狭いリビングはできあがった小物たちであふれていきました。

作っているものは華やかでも、作業している場所はまるっきり倉庫です。朝起きて、リボンやシール、粘土などが散乱している部屋をみてはうんざりする日が続きました。アトリエが欲しいなんてことを考えたのははじめてかもしれません。



仮面をつくろう



見に来てくださった人も巻き込める展示、そんなことを考えたときに思いついたのは「舞踏会のような仮面をつくって、入り口でこれを配り、みんな仮面をつけながら展示を鑑賞する」でした。

最終的にその形態は変わりますが、とにかく仮面をつくるというのは姫というテーマにも合うし、なにより自分が作りたいというので、ネットで仮面のベースを探し、カスタマイズすることにしました。

イラストレーターの展示なのですから、ここでもイラストを使用したい。でもいちいち仮面にイラストを描いている時間はなさそうです。ちょうど春先に行ったホビーショーなどのことを思い出し、自分のイラストをちぎって張子のように仮面に張るという方法を思いつきました。

やってみると、この作業が思いのほか楽しい。もしかして、この仮面作りだけでも楽しいワークショップがひとつできるかも。そんなことを考えながら作る仮面は、ちょっとほかの作業の息抜きにもなってなかなかのできばえになりました。こういうのをまさに自画自賛というのですが。

ドレスを着よう

さて、実は、展示の内容を考えているうちにはやい段階で思いついてしまったこと、それは「自分が姫のドレスを着て期間中ずっといる」というものでした。

なにしろ予想外に広い会場を借りてしまったので、できるだけ大きな展示物が欲しい。折角10年に一度の、初の個展をするので、できれば在廊し続けて、見に来てくれる人全員と会いたい。

姫のイラストで認知してもらおうなら、自分のキャラクターももっとたてたほうがいいのではないかな。

というような問題を一気にクリアする妙案、だとは思ふものの、これはかなり思い切りの必要な選択でした。

自分語りになります（あ、全部か）、これまで本名も顔もできるだけふせてやってきたのは、自分をさらけだして少しでも傷つくのが怖かったためです。仕事をはじめてしばらくは、親戚や友達にも自分のペンネームを知らせなかったりしました。もちろんホームページに顔写真などのせるのはもってのほか。ウェブは怖い、という刷り込みもありました。

でもここ数年で、自分というものを正面にだして、その責任をすべて引き受けている人たち（たいていの人がそうですが）を見て、もし自分ももっと先に進みたいなら、いつまでも奥にひきこもってはいはだめだなあと思い始めました。そして昨年、はじめて白ふくろう舎として顔写真とプロフィールなどを某専門家サイトにアップして思ったことは、この程度の露出では何の問題もないし、話題にもならないということ。

また、同業の方でも、知名度のある人は多くが、外見にも特徴をつくって人に覚えてもらいやすくするなどの努力をしていることも気がつきました。そういうことも全部ふくめて、営業努力なのだなと。これまでは、「きちんとした身なりで、相手に信頼してもらおう」などの、社会人としての意識はありましたが、少し方向性を変えるべきなのかと思い始めました。

いっそ姫の格好ならば、着ぐるみのようなもので、むしろ堂々とふるまえるかもしれないし。出たいのか出たくないのか、甚だ往生際の悪い心境ながら、ドレス探しがはじまりました。

裁縫のできない私はドレスを1から作る事など考えもつかず、かといってこんなものをオーダーすればいったいいくらになるのか見当もつかないとなると、既製品をうまくアレンジするのが最良に思われます。となると頼りはオークション。幸い、貸衣装の払い下げなどが思ったより安く出品されています。イメージにあうもの、カスタムしやすそうなもの。オークション以外のサイトやコスプレ用の商品も相当検索しました。気づけば、このドレス探しに一番時間をかけてい

たような……。しかしその甲斐あって、かなりイメージに近いドレスを格安で落札することができました。

カツラやレース、アクセサリ類も準備しなくては。ついには宝塚の好きな友達に「タカラジェンヌはどこでカツラを入手しているのか」などという相談までもちかける始末です。この友達には、ぬりえなどの印刷についても相談して、非常に役に立つアドバイスを頂きました。持つべきものは、よき友です。

いよいよドレスのカスタマイズに着手したのは、撮影（後述します）の直前。しかもやはり自分では間に合いそうもなく、急遽実家に泣きついて母の手を借りることに。実は「母の手を借りる」ということを思いついたのも、別の同業者さんが個展をするときに「家族も総動員した」という話をきいたからでした。……。本当に、周りのひとがいなかったらどうなっていたのかわかりません。

なにはともあれ、ドレスとカツラもなんとか完成しました。

ぬりえを作ろう



お姫様、少女漫画といえはやはり「ぬりえ」。以前から友達に、「イラストのぬりえが欲しい」と言われていたこともあり、今回はぬりえの体験コーナーと、持ち帰ることのできる販売用ぬりえもつくることにしました。

ぬりえには少々こだわりがあります。仕上がったイラストをDTPソフトで「主線抽出」などしただけでは、塗る側にとってはとても不親切なものになってしまいます。それに自分が子供のころ、「塗りたいもの」と「そうでないもの」は厳然とあって、背景の山だの海だの、ただ広い面積のところはつまらないとか、どこで区切っていいかわからないものは塗りにくいなどの不満もありました。あの頃の自分が喜んで塗りたくなるようなもの。子供にも簡単で、大人にはアレンジする要素があるもの。あまり高くなるのは嫌なので、そこそこまとまった数の発注をかけないと。でもこれまで自費出版や同人誌などの経験はないので、いざ印刷所に頼むのに勝手がわかりません。カツラの件を相談した友達にSOSし、彼女が利用する印刷所なども教えてもらいました。そして気がついたのです、私の個展の時期は、ちょうど同人誌界限でも最大の祭りと重なるのだと！

この期間、印刷会社のスケジュールは一気に前倒しになるのです。あわてて原稿をつくりはじめたものの、結局1-2日で完成させなくてはならず、それでもなんとかギリギリ、個展の初日にはぬりえが並べられることになりました。それにしても、納期やコストも含め、ずいぶんと個人で印刷会社を利用しやすくなったものです。本当に、よい環境にいるなとかみ締めたことでした。



(撮影 野呂英成)

「真夏の昼の姫展」は、展示の名前通り真夏、お盆明けの開催です。たくさんの方に来ていただきたいものの、この時期、お休みをとって帰省される方も多はず。それにもともと東京から離れている人は、わざわざここまで足はのばせないでしょう。そしてなにより、自分が一番この展示を味わうひまがないだろうと思われます。

そのため、早い段階で、写真で記録を残しておきたいと考えていました。自分でスナップを撮るのは限度があるので、写真は別の人に頼もう。こういうとき、やはり頼りにするのは友人知人。

何かとお世話になっているプロカメラマン、[スタジオ茶華の野呂英成氏](#)におそるおそる電話してみました。個展の開催中、1日だけ、作品と会場の様子を記録におさめていただきたい。個人の依頼は受けないのが普通だろうけれども、友人のよしみで、特別に仕事として依頼させてもらえないかと。

野呂さんは即答で「そういうことなら、仕事でなくていいですよ」と快諾してくださったのですが、さすがにそういう訳にもいきません。ではせめて友達価格で・・・などのやりとりをしつつ、展示の話をしていくうち、彼は「それなら当日のスナップだけでももったいない。事前に作品だけでもスタジオ撮りすべきだ」と言ってくださったのです。

曰く、最近の不況で、自分の周囲では暗い話ばかりだと。そういう中で、わざわざ大枚をはたいて、自分にとっては無理と思える会場を借りて、新しいことに挑戦するという話だけでも気持ちが明るくなる。どうせやるなら、作品も見栄えのよい形で残しておけば、後々まで利用することができる。最低限の経費だけ申請するから（そのほうが私も気が楽だろうから）、できるかぎりのものを写真で残しておきましょうと。

予想以上の好意にさすがに胸がつまりました。それに、きちんと作品撮りができれば、コラボレーションを依頼しているChimmieさんや青山さんにとっても、いいチャンスになると思い、感激しつつ撮影をお願いすることにしました。

とはいえ、撮影をするならはやいうちでないと、DMにも使えないしwebで事前告知することもできません。あわてて撮影用の小物を仕上げ、青山さんとCimmieさんにはスタジオ撮影してもらえ、間に合えば作品を送って欲しいことを伝え、当日に備えました。



(撮影 野呂英成)



備えました、など書いたものの、予想通り、作品をなんとかそこそこの数だけそろえられたのは当日の朝。Chimmeさんからは前日に撮影用のお菓子が届いています。青山さんはさすがに間に合わなかったとのことで、これは残念ですがそもそも無茶なスケジュールで頼んでいることなので仕方ありません。

さて、スタジオ撮影といっても、なんとなく私は野呂さんがスタイリングなどはしてくださるのではと甘い期待をもちました。もちろん、そんなはずもなく「そこから自分でしないと、勉強にならないでしょ」との有難くも断固とした言葉に、超苦手なセッティングをはじめます。このあたりの

苦労を延々話してもつまらないので割愛しますが、結果、最初の仮面の写真をとるだけで半日以上がつぶれてしまいました。

それでもなんとかお菓子や小物の撮影もしていただき、さらには「ドレスまでつくったのなら絶対その写真もとるべきだ！」という野呂さんの強い意見をありがたく頂戴し、次回のスタジオ撮りまで約束してもらうという高待遇を得て、第一回目の撮影は終了しました。



ドレスの写真撮り。これをする事になったために母の助力を仰ぐ事になったわけですが、これは恐らく自分史上1, 2を争う貴重で面白い経験でした。何しろ被写体になること自体が普段ならありえないことな上に、着ているものは結婚式でも着ないようなドレス。イラストでは散々描いているドレスもパニエも、身に着けるとなると全く勝手が違います。テーマパークで扮装写真をするようなものと思っていたら大間違いでした...

折角プロにとって頂くなら少しでも見栄えよくしておかなくては、とつけなれないつけまつげ（こんなことならギャル雑誌で連載していた頃に、読者モデルの子たちに習っておくのでした）と格闘したり、付け爪を貼ったり。化粧もどこまで濃くすればいいのかわかりません。でも宝塚好きと吹聴している以上、がんばらなくては、とよくわからない理由で自分を鼓舞してみます。モデルの撮影現場には立ち会うこともあります。自分でいざポーズをとろうとすると、野呂さんが困り果てるほどカチコチになってしまい、ずいぶんと時間をかけさせてしまいました。

しかし、当日実際に私をご覧になった方はおわかりかと思いますが、仕上がった写真は「詐欺か

」と思うようなできばえ、これでレタッチなしです。撮影者によってここまで人間かわるのか、と感動です。

「でもなんだか”姫”というかわいらしさがでない」と不満げな野呂さんに、「でも私の描く姫は皆にどこか凛々しいとか、強そうとか言われるから、自分としては気に入っている」と伝えたところ、「なんだ、それならこれでいいね!」ということになり、めでたく撮影は終了しました。





折角撮っていただいた写真があるならば、図録を作って残しておこうと思いました。

個人の展示で「図録」なんて、ずいぶんと大仰なことですが、営業ファイルを作ると思えばちょうどいい機会でもあります。とはいえ、ここにも締め切りとロットの壁が。開催に間に合うよう、そしてそれなりの値段に抑えられるようにと考えると、のせられる作品は限られます

。撮影してもらった小物、お菓子、そしてイラストのデータ。その時点では一番おおきなカラー作品は間に合いそうもなく、それでもぎりぎりまで粘った結果、冊子のレイアウトをしたのは結局また一晩だけという超特急でした。データにミスがあって納期が遅れたらどうしよう、とんでもない誤植などあったらどうしよう・・・そんなことにおびえつつ、とにかくすべりこみでデータ入稿しました。



(撮影 野呂英成)



ギャラリーレデコの1階には、素敵なラックがあります。作品パネルや本、ポストカードなどを展示するのにぴったりで、入り口から近くて背中にスチール棚もあるため、ちょっと落ち着いたスペースでもあります。

そこに、最近の掲載誌をおいて、自分の仕事と一緒に雑誌も閲覧できる書庫をつくったらどうだろうと思いました。やはりイラストだけを見るより、実際に雑誌や本になったものを見てもらったほうが、次の仕事にもつながりやすいし、ちょっとひとやすみしたいときにとりあえず雑誌があると、時間つぶしにもいいでしょう。

これまでの掲載誌のなかで今回のテーマに会うイラストをつかっているもの、自分で気に入っているものをセレクトしました。今までなら「これも、これも…」と、つい違うタッチのものも入れたくなりますが、今回だけはぐっところえて「姫」のイラストだけ選定しなくてははいけません。

それでも、一番最近の仕事である、背景の立体イラストを手がけた絵本だけは、「子供が退屈しないから」と理由をつけて加えることにしてしまったのは、ご愛嬌ということで・・・。

告知しよう



開催1ヶ月前にはフライヤーと告知用のwebを、2週間前にはダイレクトメールが届いているようにしよう。

そんな予定を、立てるには立てていたのです。ニヒル牛の石川さんはじめ、「フライヤーができたら置いてあげるよ」と言ってくれた方々に、「まだできないの?」とせつつかれることしばし。とにかく今ある素材ですぐできるものを、と突貫工事でwebに[告知サイト](#)をつくったのがギリギリ1ヶ月前の7月14日。1日仕上げです。それでもwebは、すぐにアップできるのでいいのですが、ここからフライヤーをつくるには時間的にもあまり意味がなさそうです。

結局、ダイレクトメールを大きいサイズにして大量につくり、フライヤーとしても利用することにしました。この大判サイズにするというのは、イラストレーター[進藤やす子](#)さんのアドバイスだったのですが、結果として大変好評でした。進藤さんにはこのほかにも大変親身に相談にのっていただき、本当にありがたかったです。

ダイレクトメールのデザインは、もしや家族以上のつきあいでは、と自分でも疑う同業の阪本純代さんをお願いしました。はじめは自分でなんとかするつもりだったのですが、それでは間に合わない!とあきらめ(ようやくいろいろな事にあきらめがつきはじめてた頃ではありました)、あわてて依頼したところ、自分の仕事も忙しいのに頼もしく引き受けてくれました。その頃には撮影データもできていたので、大判サイズを利用していろいろ盛り込むつもりでいましたが、メインのイラストをみた彼女は「これはイラストを生かして、全面につかったほうが絶対いいよ」と主張。デザインについてはおまかせとっていたので、そのまま仕上げてもらったところ、とてもインパクトのあるハガキが完成しました。これは本当に、自分では思いつかなかったもので、ありがたいことでした。このDMの威力は、発送時だけでなく、開催期間中も遺憾なく発揮されることになるのです。

さて、1日で作った告知用サイトですが、それまでもやもやと頭の中にあっただのものを一気にきだしたために、自分でも思いがけない言葉が組みあがっていくのは面白いと思いました。とはいえ読み返してみると、特に訂正する必要もなく、今の思いを過不足なく表現できている気がしました。

そして、折角なので英訳したのも欲しいなとmixiでつぶやいてみたところ、海外にいる友達が英訳メールを送ってくれたのです。この期におよんで人にちゃんとものを頼めない自分に、こうやって黙って手をかしてくれる友人がいることに、またしても涙腺がゆるみました。しかもその後、「ネイティブチェックをしてもらってね」といわれても「ネイティブの友人がいないし」

と放置していた私に「一応友達にみてもらったよ」とチェック後の文章まで送ってくれた彼女には、もうなんとお礼を言っているのかわかりません。

・・・こう書いてみると、どうも私はいろいろな方面から甘やかされすぎていますね...。

告知といえば、もうひとつ、今回はニュースリリースというものを流してみようと思っていました。どれくらい効果があるものか知りたかったのと、あぐるさんに「個人でも利用しやすい料金のサイトがあるよ」と教えていただいたからです。リリースを流してみた印象としては、私の個展については「口コミ力にかなうものなし」ですが、リリース自体は後々自分のサイトのSEOなどに影響してくるだろうという目論見もあるので、これはこれでよしと思っています。それにしても、このリリースを出した頃にはまだいろいろなものが完成していなかったもので、内心は相当冷や汗ものでした。



いよいよ切羽詰ってきた日、友達のSさんが我が家に助っ人としてやって来ました。「ちょうど夏休みだから手伝いできるよ」と言ってもらったものの、折角のお休みを私の手伝いでつぶすのは・・・とっていたのですが、そんなことも言っていられなくなり、お言葉に甘えることにしたのです。そんなことならはじめから頼んでおけばよかったのですが、そのあたりについてはもう後でまとめて反省することにします。

実はまだまだ片付いていないことが多く、作品につけるキャプションやPOPなどをパネルにはりつけてもらったり、仮面を増産してもらったり、芳名帳を飾ってもらったり、かなりこきつかうことになってしまいました。

お昼は、一人ではなかなか食べることもないデリバリーピザ。おもたせのデザートもいただいて、作業ははかどるわ楽しいわ、「間に合わないかもしれない！」とかなり不安定だった気持ちがおかげで大分落ち着きました。

「初日も手伝いに行くからね」と言ってくれた彼女、そんなに何日も来て貰うわけには・・・と思いましたが、「楽しいからいいんだよー」と。

何で皆こんなに気前がいいんだろう。自分はこのように気持ちよく人を手伝ったりできているだろうか？反省しきり、いやそれはあとまわしにするのでした。これだけたくさんの人たちの力をかりているのだから、なんとしてもいい展示にしなければ！ラストスパート、気合をいれなおします。





搬、搬入日まであと数日。会場レイアウトを考えようとルデコを訪れました。ちょうどグループ

展が開催されていて、その作品量に圧倒され、やはり「顔はめ」を作ることを、急遽決意。

実は当初、通りからガラス越しに見える立地を生かして、お姫様になれる顔はめを置くことを考えてはいました。ただ、そのあと敬愛する高橋真琴さんの展示でも同様の顔はめがあったことを知り、真似をしているようなのでやめよう・・・と思ったのです。でも、会場がスカスカでは困るし、背に腹はかえられない！いまさら真似したとって、そもそもこの画風が高橋先生はじめ先人の真似なわけで。こだわってもしょうがない、とあっさり判断を翻し、顔はめ用イラストを描き始めたのは、またしても搬入日の前日でした。一日で仕上げてくれる、リーズナブルな業者さんを見つけられたのも幸運でした。自分でもあきれほどのギリギリペースでデータを入稿、バタバタと搬入の梱包もしつつ、あっという間に日付は変わっていき、なんとか準備が整ったのは、大げさでもなんでもなく、赤帽さんが来る直前でした。



とうとう搬入の日、荷物と共に赤帽の車に乗り込み（いえ荷台ではなく助手席です）、渋谷のギャラリーにむかいます。搬入は、高校時代からの友人のYさんFさん、カメラマンの野呂さん、そしてバッグ作家の青山さんが手伝ってくださるのです。

作品のことで頭がいっぱいで、搬入はまあなんとかかなるか、頼める相手も思いつかないし、とぼんやりしていた私にYさんがメールをくれて、「搬入とか手伝うよ」といつてくれたときにはびっくりしました。考えてみたら一人ではどうしようもないのです。青山さんも「搬入ははじめから手伝うつもりだから」と、作品づくりでへとへとなのはきいていたので申し訳ないと思っていながら、ここでもまた結局皆の好意に甘えることにしました。

ルデコのオーナー島中さんも、必要な什器を揃えていてくれます。

荷物のおろしは赤帽のドライバーさんがあつという間にやってくれ、「荷おろしのあいだに設置について考えよう」などとのんきにしていた私は、すぐにまわりから「それで、何をどうすればいいの？」とせつつかれることになりました。・・・ああ、我ながらどれだけつかえないんだ。



それでも「ここをこうしたい」「あれをああしたい」と、指示ではなく希望をつたえると、その方法は各人が考えてくれるという、素晴らしい環境の中、少しずつ会場はできあがっていきました。もし私が会社の社長だったらこういう社員は金の下駄をはいてでも探す（...?）と、心底思います。でもこれは仕事ではないからこそもらえるギフトのようなものなのだ、ということは、設営中もひたひたと胸に染み込んでい

ました。そういえばYさんやFさんには、高校の剣道部で一緒だったころから、文化祭だの何だのでいろいろ一緒に巻き込まれてもらっていたなあ。

作業に疲れたところで、Fさんの差し入れの手作りおにぎりやマフィンでひとやすみです。一番働いていない（今ふりかえってもこれは確かです）自分が一番疲れていて、ごはんの後はもうほとんど日本語にならない言葉を発しているのをみかねて、皆がどんどん作業をしてくれるのが本当にありがたかったです。青山さんには、小物のディスプレイまでまかせてしまいました。「とりあえず、並べるだけは並べるから、ちゃんと後で自分の好きなように直してね!」といわれたはずなのですが、多分当日ごらんいただいたのは、彼女の並べたほぼそのままです。



・・・私はこれを自分の個展だなどといっているのでしょうか・・・。

なにとはともあれ、皆でああでもないこうでもないかと相談しながらやるうちに、会場は思ったよりもずっといい感じになってきました。コラボレーションバッグは、モチーフとなったイラストと一緒に展示。ぬりえコーナーも、エコバッグのコーナーも、物販コーナーもできました。顔はめも堂々とそびえ立っています。ガラスには透明なシートにプリントしたイラストをのれんのように吊るしました。仮面は結局、入り口近くの棚にかざり、顔はめといっしょに「ご自由に試着(?)できます」の撮影コーナーにしました。どうしようと迷っていたお人形のついた傘はピアノの上に。書庫は、やはり青山さんの鶴の一声で、「表紙ではなくイラストのページを表に出す」陳列方法に。芳名帳は羽ペンと一緒に、期間中「懺悔部屋」とよばれる小さなスペースに、ミニテーブルと椅子と共に設置しました。

これで明日、Chimmieさんがカフェスペースを整えてくれれば、「真夏の昼の姫展」はいよいよ開幕です!



「真夏の昼の姫展」初日の朝。まだギャラリーのかたもない会場で、私はひとり夢の中のよう

な気分でした。

これから最後の準備をして、ドレスに着替え（おお）、chimmieさんを迎えて打ち合わせもしなくてはいけないので、ぼーっとしていたのはほんの数分だったと思うのですが、不思議な時間でした。

ギリギリに入手したフレームにおさまったイラストは、大小あわせてカラーが5点、モノクロが8点。小物やアクセサリは、数がまとまれば販売したかったけれど、そこまで作れなくて結局陳列するだけになりました。



青山さんのコラボレーションバッグは2点、実物をみたときには一気に心拍数があがった、見事な出来栄。イラストの主線に金糸で刺繍がほどこされていたり、ワイヤー製のバラが縫い付けられていたり、いくえにもレースがかさなって、ビーズがちりばめられていたり、どれだけの手間と時間がかかっているのでしょうか。そしてなにより、そんな姫姫しい（なんて言葉はありませんが）モチーフが、少年がもつよ

うな肩掛けのメッセンジャーバッグのような仕立てのバッグになっていることが嬉しく、「こんなバッグみたことないでしょう！」と自慢して歩きたい気分です。もっともこれから6日間、自慢しつづけるわけですが。結局これには値段がつけられず、最終日に私とchimmieさんが頂いてしまうことになるのですが...（欲しがって下さったかた、本当にすみません）。

あれもこれも、並べてみれば結構な数のものをこしらえていて、もちろん心残りはあるけれど、当初思い描いていたものはなんとかほとんど実現させることができたことは驚きです。あらためて、一人ではできなかつたなあとしみじみ思います。



そんなことを思いながら、ようやく思い切って（これでもやはり思い切りが必要なのです）ドレスに着替え、カツラをかぶってみると、ああ案の定動きにくいことこの上なしです。しかもガラスごしに朝の通勤中の人たちとうっかりすれば目がいそうになります。私はいいけれど、相手は一日をなぞにつつまれて過ごさなくてはいけなくなるので、できるだけ目立たないところにいなければ。

そのとき突然、ドアを叩く音。どうやら出なくてはいけない！あわてて動こうとしたとたん、いきなりドレスのすそを踏みつけて、とっさに「後ろに倒れないとまずい！」と尻餅をつきました・・・。しょっぱなからこれです。

訪問者は宅配業者のかたでした。お世話になっている編集部からの、見事な花！これから続々、会場は花でうめつくされていくのですが、それにしても当日一番に転ぶとは・・・。しかしおかげで懲りたのか、ドレスで転んだのは後にも先にもこれ1回ですみました。



荒療治で目も覚めたところで、chimmieさんも到着。完成したお菓子を大騒ぎしながらキッチンを整えるうちに、当日の助っ人として再びSさんや青山さんも来てくれました。いよいよ、本当にいよいよ、開場です。



初日、開幕



10時、いよいよ姫展の開幕です。

この猛暑で朝からお客様は汗だく、ご来場されたらまずは冷たい薔薇緑茶をサービス。これはことのほか皆さんに喜んでいただきました。chimmieさんが入手した薔薇のつぼみと緑茶のブレンドは、水だしとは思えない香りの高さなのです。



表の扉には「ご自由にお入りください」と書いた大判のポスター。SさんのアイデアでDMをいれるポケットをつけました。これは集客効果抜群で、追加するたびになくなって、このDMを手「気になったから...」と戻ってきてくれるお客様たちも。イラストを全面につけてくれた阪本さんにも感謝感謝です。

嬉しかったのは、お昼やすみに近所の会社のOLさんたちが、お財布とIDカードを片手に「顔はめ」めあてでやってきてくださったこと。結局2日続けて塗りえをしに通ってくださるかたちもあらわれました。

初日にはお休みだった島中さんに、それをお話したところ、「近所のOLさんが入ってくれたことなんてなかったんじゃないかなあ」と言われたときには、思わず胸の中でガッツポーズしました。

初日はやはりご来場者が多く、完全にスタッフとして働いてくれる友人たちの接客のうまさにも感嘆することしきり。ぬりえはお子様にも大人にも好評で、思った以上のかたが長いこと「はまって」くださいました。それから意外と盛り上がったのが仮面。ひとつつけてみると、思いのほか似合うというので、皆さんひとしきり全部つけてみては写真を撮ってくれます。これがガラスごしに見えるので、また通りすがりのお客様の興味をひくという、なかなかの好循環。



当の私はというと、なにしろトレーンの長いドレスをひきずって歩いているため、お茶をだそうとか何かをすすめようとすると「ああ、私がやりますから動かなくていいです」と気をつかわせる始末で、文字通り何もできない姫様状態です。でもこの姫様装束のおかげで「わあ、姫がいる！」と皆に喜ばれて、気分はテーマパークの人気キャラクター。別に何かのコスプレではないので、「姫」というアイコンの強さをまざまざと実感することになりました。どこのイラストレーターが、自分の個展にたまたま入ってくれた見知らぬ人に、「

一緒に写真とってください」「撮らせてください」と言ってもらえるのでしょうか・・・いや、有名作家ならもちろんあるでしょうけれど。

子供、特に小さい女の子にはやはりドレスが大うけで、ずっと後ろにくっついて、結婚式の子役よろしくドレスのすそをかかえて歩いてくれるボランティアちゃんまで登場しました。女の子は小さくても、目ざとくネイルアートやアクセサリーをみつけてしげしげと眺めるのです。普段甥っ子ばかりみている自分には新鮮です。

多忙な中を駆けつけてくれた、お世話になっている編集さん、イラストレーターのお友達、学生時代の友人、ネットで知り合った人、そしてたまたま通りかかって吸い込まれてくれたはじめましてのかたたち。たくさんの方にご来場いただき、初日はあっという間に過ぎていきました。



2日目からは基本的には一人でギャラリーをきりもりしなくてはなりません。前日の使えないぶりを実感しているので、どうなることかと不安でしたが、頼る人がないとなれば何とかなるもの。初日に比べればお客様のペースもゆったりで、しかもかなりの部分をセルフサービスで動いていただけだったので、大問題もおこらず、楽しい時間を過ごさせていただくことができました。

2日目はふりかえってみると、男性と女性が半々くらい、しかも特にこの展示をご存知なくおいでくださった方もいらして、意外と男性も大丈夫なのかも？と思ったりしました。嬉しいのは、2階から上の展示に参加している人たちが「1階がすごいらしいよ」と口コミで広めてくれて、交互にみにきたり、自分のお客様を誘導して下さったりしたこと。なにぶんこちらは一人で、しかもこの衣装を担いで上に行くわけにはいかず、結局ほかの展示を見られずに終わったのは心残りです。

お菓子も順調に売れていますが、一番目を引くのはやはり「黒薔薇クッキー」。一人で立ち寄っ

て下ったかたも、お茶をかたわらに、塗り絵に没頭したり、書庫で雑誌を読んだり...一瞬「ここ、どこだっけ?」と思うような空気が流れて、だんだん自分がドレスを着ていることの違和感も減ってきたのがおかしいです。



3日目も比較的ゆったりと過ぎました。とはいえ家族連れや旅行中の方、すでに常連ぽくなった方、お仕事がらみの方やお世話になっている先生など、お客様は常にいらっしゃるの、退屈することはありません。時間があればあるだけ、ないときはないなりに、普段は会えないたくさんの人とお話することができて、いろいろ迷惑はおかけしたものの、期間中は在廊することにして本当によかったなと思いました。

そうそう、家族連れといえば、期間中何度も「この子がこんなに集中している姿をみたのははじめて」という言葉をききました。塗り絵に没頭したり、パズルをしたり、女の子の好きなことというものもあるのですが、「姫さまっぽい空間」にいるということが、彼女たちに影響したんだろうなあという気がします。女の子は「よそゆき」が結構好きですからね。



4日目の印象は「女子」です。いえもちろん男性もいらっしやったのですが、なんというか、女の子のもつ「楽しむ才能」のようなものをひしひしと感じた1日でした。たとえば、ポスターをみかけたお嬢さんが、お母様に「こういう展示があるから行ってくれば」と知らせてくれて、母娘それぞれにご来場いただいたり。買い物帰りにと、閉場まぎわに寄ってくれた仲良し3人組は、それぞれ小物や塗り絵や書庫に陣取って、思い思いの楽しみに集中したり。

見ようと思えば、結構こまごまとしたものがたくさんあるので、ちょっと腰掛けたり荷物を置く場所がふんだんにあるのはやはりいいです。そして今日も懐かしい顔、サプライズな訪問、たくさんのしあわせがありました。それにしても「姫」とよばれることも、写真をとられることも、声をかけることもだんだん板についてきて、自分で鏡をみるまでこのいでたちを忘れていたり、どちらが日常だかわからなくなってきました・・・。



5日目は土曜日です。週末ということもあって、今日は心強い助っ人がまたまた登場です。Sさんと、3人でなにかとつるんでいるMさん、本当は二人で個展に寄ってくれて、そのあとは遊ぶ予定だったと思うのですが、結局そのままスタッフのように働き続けてくれました。そして土日スペシャル、chimmieさんが登場。白桃と薔薇のブラマンジェを提供してくれます。ちなみにchimmieさん、「あたまを盛る」テーマにあわせて、パティシエのあの帽子を花で飾り付けてきてくれたのですが、これが実にお似合いです。



白状すると、金曜、土曜あたりは、ドレスというよりも底上げしているポックリ状のサンダルをはいているのが大変辛く、「今日くらいはちょっとヒールのあるサンダルでいいか・・・」と思ったりしたのですが、いざ会場につくと「だめよ、私は姫なんだから！」とやや意味不明な闘志がわいて、結局全期間、衣装は当初のまま貫くことができました。・・・まあ、自分で勝手にやったこととはいえ、この頑張りが何かの足しになってほしいと願わずにはいられません。

そういえば期間中一番きかれた質問は、「このシャープペンの絵を描くのにどれくらいかかるんですか？」とともに、「そのドレスは自前ですか？」でした。...イラストとドレスが同列あつかいです、ドレスが圧勝でなくて本当によかった。「ドレスも作品よ」と言っていればそれでいいかもしれませんが。



土曜はサプライズゲストが多かったです。OLのころにお世話になったかたや、お仕事をご一緒しながらまだお会いしたことのないかた。週末ということで赤ちゃん連れも多く



、またお母様と共にという方も結構いらっしゃいました。度肝をぬかれたサプライズといえば、カツラやぬりえの相談をさせてもらったOさんが、元タカラジェンヌ、星組の星風エ

レナさんをお連れ下さったことでしょうか。本職の姫を前にカチコチに、その後舞い上がっている私に、星風さんは「ドレスのすそは移動するときはこうやって...カツラの手入れをするときは...」とニコニコ微笑みながら教えてくださいました。ああ、折角の教えを無駄にする姫ですみません！！

折角といえば、折角きていただいたのだからと、お仕事関係の方や友人同士でなにかご縁がありそうなかたをせっせと紹介したのですが、そこからも意外なつながりがみつかったり、その後お仕事が依頼されたりと、広がりがあったのは嬉しいかぎりです。

そして閉場後。明日のパーティーについて、chimmieさんと話していたところ、手伝ってくれた友人たちが「明日のレイアウト変更、やったほうがいいんじゃない？」と言い出してくれまして...あ！そうか！レイアウト変更か！もしかしてそのために青山さんが仕事帰りにかけつけてくれたのですね！？どこまでおんぶにだっこなのか...！「バッグは汚れるといけないから壁にかけたら」「こっちも座れるスペースをつくろうよ」じゃあ塗り絵のスペースとバッグを移動して・・・」相談しながら手際よく、細腕が（本当に）家具をちゃきちゃき移動していく様は、ため息ものでした。



いえため息をついてないで働きましょうね、私。



最終日、クロージングパーティーです。この日のみ、入場料1000円（予約不要）。chimmieさん特製お菓자에軽いおつまみ、ドリンクがつきます。実は直前になって、「1000円だと少し物足りないかも・・・半額にしますか？」といわれていたのですが、うーんそれじゃあchimmieさんの人件費もでないでしょう...。というわけで急遽、「300円で販売している図録をお土産にもっていただくといいおまけつきに。前日つくったパスがわりのシールも用意して、パーティー準備開始です。本日は総力をあげてとりくむということで、DMをデザインしてくれた阪本さんがメイドとして参加！だれのといって私のテンションが一気に

あがっています。chimmieさんの相棒Tさんも厨房ヘルプとして到着。二人で手際よく仕込みをしていきます。そしてすでに専属スタッフのようになってしまった友人Sさん、撮影をお願いしているカメラマンの野呂さんもスタンバイ。この方、あまりに態度がカジュアルすぎて、一部のお客さんに「写真が趣味のアキバ系の人」と思われていたといううわさも...ち、違います！メジャーな仕事をいっぱいしてらっしゃるプロカメラマンさんです！スナップをとりまくっているのは大サービスなのです！

今日は有料だしね、と比較的のんびり構えていたのですが、午前中から



お客様はぞくぞくご来場。朝一番に来てくださった宝塚仲間のKさんたちには、「あの、私たち華道部だから、お花を少し生けかえましょうか?」とお願いいただき...はい、お察しの通りお言葉に甘えて、6日目で大分くたびれてきていたお花をかなりきれいに整えなおしていただきました。こんなに毎日親切にされていると、もう庶民の暮らしに戻れなくなるのではと心配です。



最終日は日曜ということもあって、結局それなりの人数がお越しください、一番知り合いも多かった日のため、かなり多くのかたと十分お話できないまま終わってしまったのが心残りです。特に夜になってのご来場も多く、最後はほとんどかけあしのようなご挨拶になってしまいました。それでも、皆様それぞれが本当にお互いうちとけて楽しく交流してくださっていたのがとても幸せな光景で、このままパーティーが終わらなければいいのに!と思ったほどです。

chimmieさんの仕事さばき、接客も見事で、ホテル仕込みの立ち居振る舞いはほれぼれする美しさ。焼き菓子やおつまみの他、冷菓も出してください、さらには「[しろぐるめ](#) (私のレシピブログです。←宣伝)」のレシピ、某コンテストでグランプリをとった (←自慢) アボカドポタージュまでメニューに加えるという大盤振る舞い。

会場には、姫展のパーティーだからと、コスプレというかドレスアップしてくださった友達もちらほらいて、非常に華やかかつあやしい雰囲気です。少量ですがお酒もあって、カウンターで話し込む人、テーブルでくつろぐ人、展示を見て回る人、やはり塗りえや顔はめも人気で、どなたかが言ってくださいましたが、賑やかなのに本当に「ピースフルな空間」のまま、閉場時間をむかえることができました。

・・・さて、ここで大団円としたいところですが、この後の展開が個人的に大変感動的でした。閉場時間になってもなかなか帰らない友人たちに、(ああ、打ち上げとか、ゆっくり話せる時間を待っていているのかな...でも私は荷物と一緒に赤帽トラックに乗らないといけないから...)と、その旨伝えようとすると、皆がそれぞれ「いや、搬出を手伝おうと思って残っているよ」と。

さすがにこのときは泣けそうになりました。搬出にも、青山さんや阪本さんのご友人が手伝いに来てくれることになっていて、少し手は足りないかもしれないけれど十分なんとかなるだろうと思っていたのです。

いざ扉をしめると、皆がすごい勢いで働きはじめてくれ、梱包された品々は次々とダンボールにつめこまれ、私がドレスを着替え終わった頃にはあらかた片付いているという手際の高さでした。



実はこのパーティーのあともギャラリーには次の予定がはいついて、あまり時間がなかったのですが、最後は皆でいただいたお菓子や、飲み物でひといきついてトラックを待つほどの時間が

ありました。

ここまでしてもらったのに、この時点で頭の飽和していた私は、ちゃんと会計もできずとにかくやってきたトラックに乗り込み、皆に見送られながら渋谷の、幻のお城をあとにしたのでした。



文字通り真夏の白昼夢のような個展は終わりました。

あれから一ヶ月近くたつ今、魔法のとけたシンデレラ状態の私はたまっていた仕事を仕上げつつ、いまだに広がっているダンボールを少しずつ片付けているところです。

新しいダンボールを開くたびに、丁寧につつまれた品物がでてきて、あの忙しい中で「大事なものだから」とひとつひとつ気持ちをこめて梱包してくれた人の手を思って、いまだに涙腺がゆるんでしまいます。

個展をひらこうと思ったときに掲げた目標は、どれだけ達成できたのかというと、実はちょっとわかりません。

もしまた10年後に個展をするならば、今後は絵だけをみにきてもらっても十分満足してもらえるような作品が描けたらいいなと思いましたが、これもどなたかが言ってくださった「展示だと思ったら小さなテーマパークだった」ような今回のスタイルは、自分にとってもとても楽しく、やった甲斐のあるものでした。

暑い中、忙しい時間をやりくりして立ち寄ってくださったひとたちが、「あの夏はあんなところに行ったな、結構楽しかったな」と思い出してくれたら、とても幸せだと思います。

内弁慶で、人付き合いが下手なうえに転校や引越しも多かった子供のころの自分が、いつも絵に助けられて友達をつくってきたように、今回もまたイラストを通じてこれだけのご縁が広がって

いたんだなあと、今しみじみかみ締めています。

備忘録のつもりで書き始めたこの日記（日記といつつ3日で書いていますが）も、本人以外にはあまり面白いところもなく、ここまで読んでくださった皆様には申し訳なくも感謝でいっぱいですが、もし「こんなイラストもいいな」「面白いことをするな」と興味をもってくださったなら、また新しいご縁になればとても嬉しいことです。

あらためて、イラストレーターという仕事を続けていられること、支えてくださっている皆様に感謝いたします。

どうもありがとうございました。

*当日の様子をレポートして下さった皆様のブログ記事リンクを[こちら](#)に作りました。よろしかったら是非。

2010.9.9 白ふくろう舎

白ふくろう舎情報

ホームページ 46296.com

(ブログ [白ふくろう舎special](#))

レシピブログ [「しろぐるめ」](#)

twitterID [46296](#)

Shirofukurosy(46296)

[Facebookページも宣伝](#)

「真夏の昼の姫展」日記

<http://p.booklog.jp/book/8135>

著者 : 46296

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/46296/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/8135>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/8135>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.